山口県土井ヶ浜遺跡第 14 次調査出土のサメ歯製品

沖田　絵麻

はじめに

筆者は、土井ヶ浜遺跡から出土した動物遺存体と骨角製品の整理・分析を進めている。その作業中に、これまで明らかになっていなかったサメ歯製品を 2 点発見した。周知のとおり、土井ヶ浜遺跡では第 2 次調査でも 124 号人骨に伴うサメ歯製品が 2 点出土しており［金関ほか 1961］、今回見つかった資料を含めると 4 点となる。これらの資料は、弥生時代の土井ヶ浜遺跡を理解する上で重要な資料の一つと考えられるため、ここに紹介する。さらに、第 2 次調査出土資料と比較し、土井ヶ浜遺跡におけるサメ歯製品の特徴についてまとめる。

1．土井ヶ浜遺跡第 14 次調査地点について

(1) 土井ヶ浜遺跡

土井ヶ浜遺跡は山口県下関市豊北町神田上に所在し、響灘（ひびきなだ）を臨む砂丘に立地する（図 1・図 2）。昭和 28（1953）年から平成 12（2000）年の間に、合計 19 次にわたる発掘調査がおこなわれた。弥生時代前期～中期、弥生時代終末期～古墳時代、中～近世の遺構・遺物が確認される複合遺跡であり、特に保存良好な多数の人骨が出土した弥生時代の埋葬遺跡として著名である。

(2) 第 14 次調査[1)]

新たに見つかったサメ歯製品は、いずれも第 14 次調査において出土したものである。第 14 次発掘調査は、国指定史跡である土井ヶ浜遺跡の史跡指定地周辺の状況を確認するため、国庫補助・県費補助を受けて、豊北町教育委員会（当時）が主体となり平成 7（1995）年 9 月 12 日から同年 12 月 1 日まで実施された。第 14 次調査区は江尻下（えじりしも）公民館の跡地を含む約 70 ㎡の調査区であり、遺跡の西部に位置する（図 3）。14-1 区から

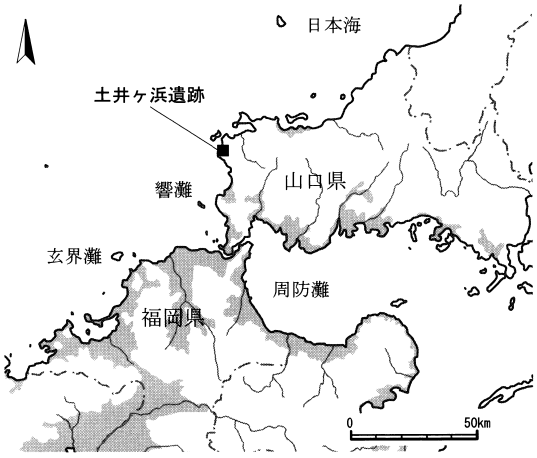


図 1　土井ヶ浜遺跡の位置

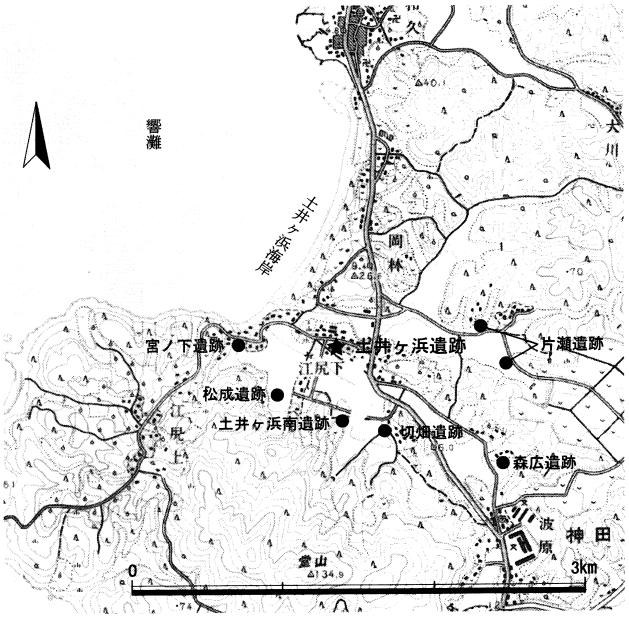


図 2　土井ヶ浜遺跡と周辺の弥生時代遺跡

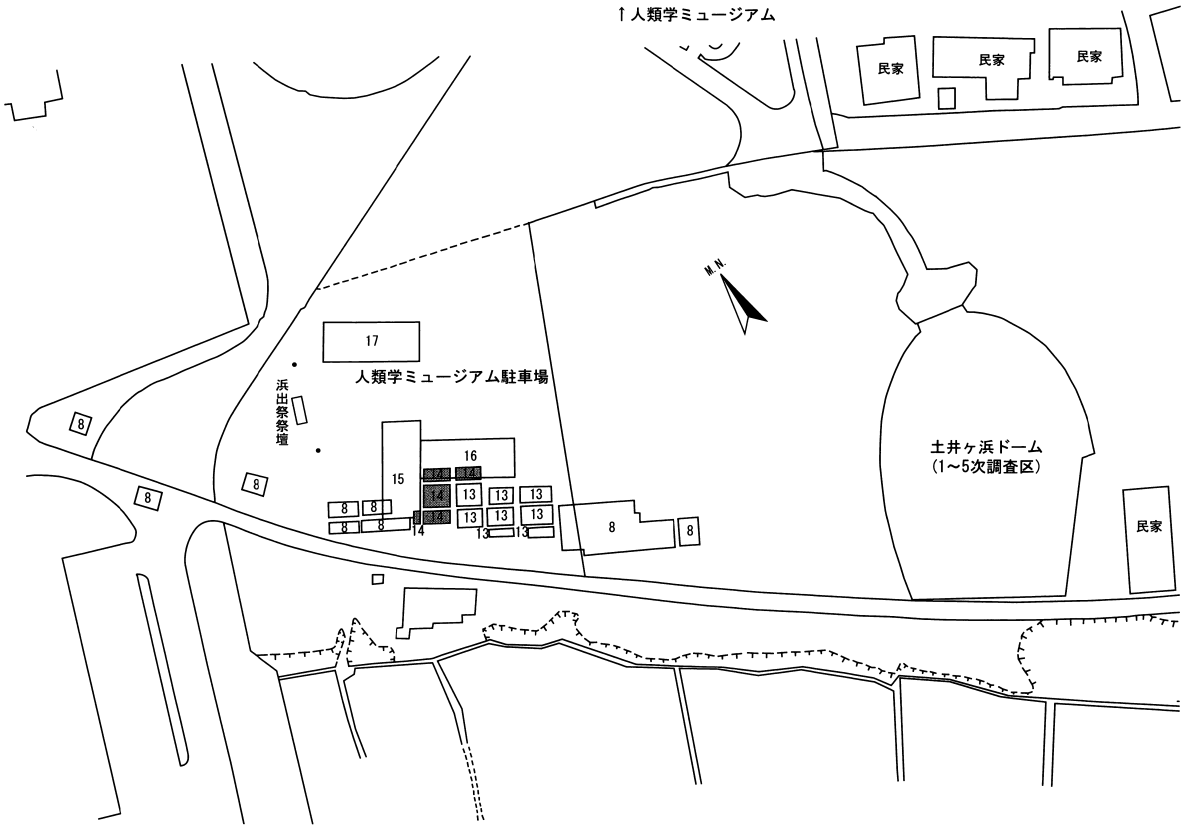


図３　第 14 次調査区の位置（S=1/1000）　※区画内の数字は調査次数を示す。

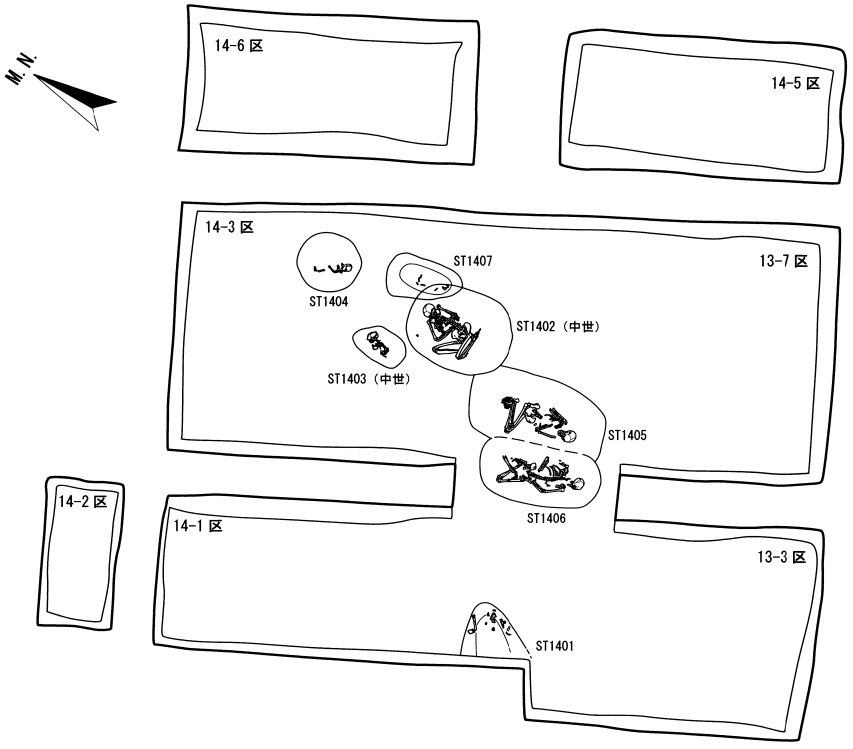


図４　第 14 次調査区埋葬遺構配置図（S=1/100）

14-6 区までの 6 区画のトレンチが設定されたが、14-4 区は次年度の調査にまわし、隣接する前年度の 13 次調査地点の 13-3 区・13-7 区を再発掘している。

発掘調査の結果、弥生時代の埋葬遺構５基、中世の埋葬遺構２基（図４）、弥生時代終末期～古墳時代初頭の土坑２基が検出され、遺跡西部における弥生時代埋葬遺構の状況と、弥生時代終末期以降～中世における土地利用を把握する上で重要な成果が得られた。その成果は、報告書［松下・有福 1996］として公表されている。

今回紹介するサメ歯製品は、報告書では未報告となっている資料である。未整理の土器片等が入った袋から動物骨や貝殻を抽出する作業中に発見した。いずれも弥生時代の埋葬遺構である ST1405 と ST1406 から 1 点ずつ出土した。ST1405 のラベルに 1995 年 11 月 23 日出土の記載があるが、遺構内での詳細な出土位置・層位の記載はどちらにも無かった。後述するように、ST1405 と ST1406 は墓坑が切り合っているため、本来はどちらかの墓坑に 2 点あったものが移動した可能性も考えられるが、ここでは問わない。

２．出土遺構について

(1) ST1405 （図５）

ST1405 は、14-1 区と 13-7 区の境界に位置する。墓坑の平面プランは隅丸長方形で、規模は長軸 190 ×短軸 106cm、深さ 62cm である[2)]。他の埋葬遺構と切り合いがみられ、北西端を ST1402 に切られる一方、ST1406 の北辺を切る。

被葬者は熟年男性 1 体（1405 号人骨）で、頭位方向を南東にとり、仰臥屈肢の姿勢で埋葬されていた。1405 号人骨には上下両顎側切歯の抜歯がみられる。また、人類学的分析の結果、1405 人骨は高身長

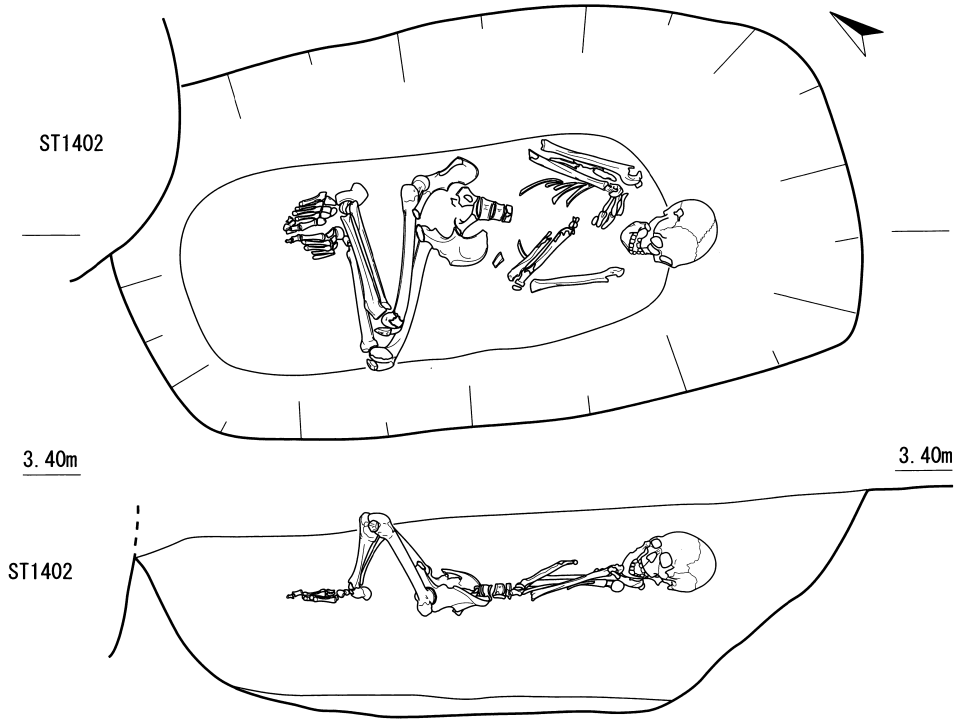


図５　ST1405 実測図（S=1/20）
［松下・有福 1996］より一部改変して再トレース

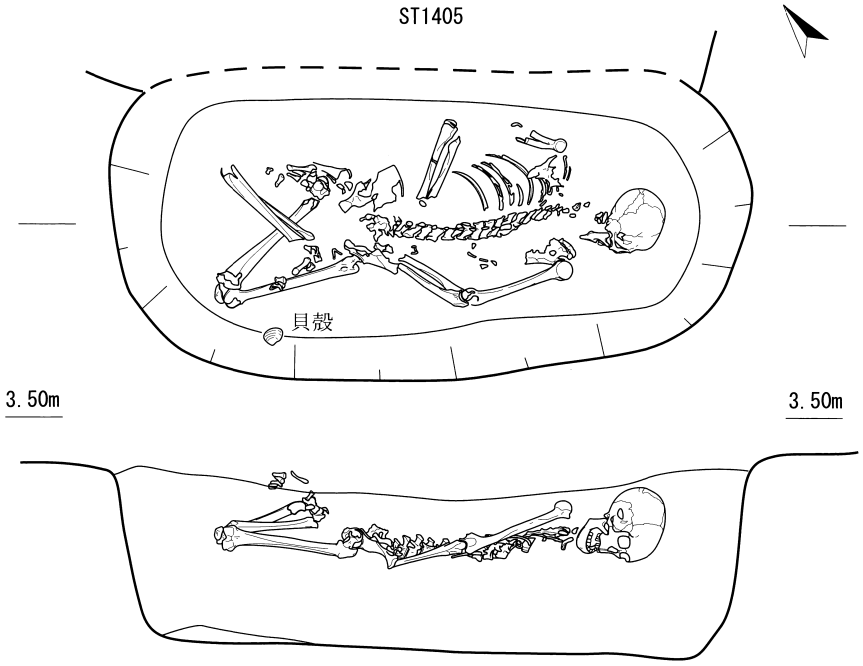


図６　ST1406 実測図（S=1/20）
［松下・有福 1996］より一部改変して再トレース

で頭蓋骨が小さく、上腕骨が細いという結果が得られている。現場段階で共伴遺物は確認されていないため、今回報告するサメ歯製品が唯一の出土遺物となる。

(2) ST1406　（図６）

ST1406 は、13-3 区と 13-7 区の境界に位置する。ST1405 の南西に隣接し、墓坑の北辺を ST1405 に切られている。墓坑の平面プランは隅丸長方形で、規模は長軸 170× 短軸 82cm、深さ 55cm である。

被葬者は熟年男性１体（1406 号人骨）で、頭位方向を南東にとり、非常に稀とされる伏臥屈肢の姿勢で埋葬されていた。1406 号人骨には上顎左右犬歯の抜歯がみられる。また、人類学的分析の結果、1405 号人骨と比較して低身長で頭蓋骨が大きく、上腕骨が太い。さらに、1406 号人骨には外耳道骨腫が見られることから、漁撈従事者の可能性が指摘されている。現場段階で遺物は確認されていないため、今回報告するサメ歯製品が唯一の出土遺物となる。

３．第 14 次調査出土サメ歯製品

(1) ST1405 出土サメ歯製品（図８No. 1）

欠損のない完全形である。歯の長さ 11. 0mm、高さ 10. 0mm、厚さ 1. 6mm、重量 0. 10g である。[3] 歯は側尖頭が無いタイプで、主尖頭は歯根部に対してやや屈曲するため片側の縁が窪み、歯冠の縁は細かい鋸歯をもつといった特徴がある。素材の種は不明だが、これらの特徴からメジロザメ科[4]の上顎歯の可能性がある。片面の中央部～下部を削り平坦に加工する。削った面には一方向に走る細かな条線がみられ、研磨痕か加工具の刃こぼれ痕と考えられる。

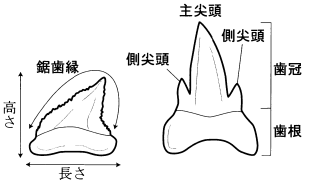


図７　サメ類の歯の模式図

(2) ST1406 出土サメ歯製品（図８No. 2）

歯根の一部を欠損する。現状での長さ 10. 0mm、高さ 11. 5mm、厚さ 1. 8mm、重量 0. 08g である。歯

はST1405出土資料と特徴がよく似ており、素材の種は不明だが、同様にメジロザメ科の上顎歯の可能性がある。加工も同様で、片面の中央部～下部を平坦に削る。加工面は磨滅しているため、ST1405出土資料のような条線は確認できない。

４．第２次調査出土サメ歯製品

(1) 124号人骨に伴うサメ歯製品－１（図８No.3）

欠損のない完全形である。歯の長さ11.9㎜、高さ17.3㎜、厚さ2.6㎜、重量0.28gである。歯は側尖頭が無いタイプで、主尖頭は真っすぐ長く伸び、縁には細かい鋸歯がある。素材の種は不明だが、これらの特徴からメジロザメ科の下顎歯の可能性がある。両面の中央部～下部を削り歯根部の厚さを調整する加工が見られる。削った面には細かな条線がみられ、研磨痕か加工具の刃こぼれ痕と考えられる。

(2)124号人骨に伴うサメ歯製品－２（図８No.4）

歯根の一部を欠損する。現状での長さ18.4㎜、高さ18.6㎜、厚さ2.9㎜、重量0.42gである。歯は側尖頭が無いタイプで、主尖頭は歯根部に対してやや屈曲するため片側の縁が窪み、歯冠の縁は細かい鋸歯をもつといった特徴がある。素材は第14次調査出土資料と同様に、メジロザメ科の上顎歯の可能性がある。ただし、それらと比較して歯のサイズが大きい。加工も同様で、片面の中央部～下部を平坦に削る。加工面は細かな条線がみられ、研磨痕か加工具の刃こぼれ痕と考えられる。

５．土井ヶ浜遺跡出土サメ歯製品の特徴

(1) 素材

現時点で種は不明だが、いずれもメジロザメ科とみられるサメ類の歯であり、側尖頭がなく、細かい鋸歯縁があるという特徴が共通する。メジロザメ科のいくつかの標本と比較したところ、上顎歯と下顎歯を使用している可能性がある。サメ類の歯は同一個体でも上顎と下顎では形態が異なり、さらに片側の顎でも位置により形態やサイズが異なる場合がある。そのため、土井ヶ浜遺跡から出土した４点のサメ歯製品は、同一個体から得た歯を素材としている可能性も考えられる。

なお、土井ヶ浜遺跡からはこれら4点の製品以外にサメ類の遺存体は出土していないため、素材としての顎や遊離歯の状態、あるいは製品となった状態で他地域から持ち込まれた可能性もある。

(2) 加工

いずれも歯根部のふくらみを削りとるだけの加工である。両面加工が見られる1点は、片面加工の3点と形態が異なることから下顎歯の可能性があり、歯根部の形状も他の3点とは若干異なる。4点の資料に見られる加工は、歯根部の厚さを調整する意図があるといえ、4点とも同じ製作工程を経た製品ととらえることができる。

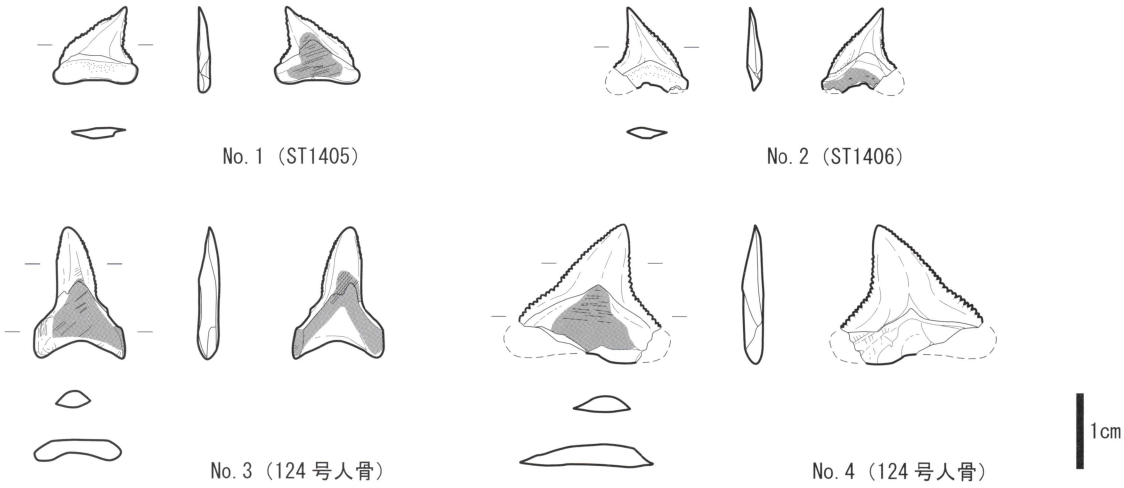
加工に用いた工具については、4点のうち3点の加工面に細かな条線が走ることから、刃こぼれのある刃物や粗い砥石が想定される。刀子状の工具で削る、あるいは砥石で一定方向に擦るという工程で仕上げたものであろう。

(3) 用途

124 号人骨に伴う 2 点は、12 点の石鏃とともに人骨の胸部～腰部から出土し、「牙鏃」と考えられている。第 14 次調査出土の 2 点も同様の製品であることから、牙鏃ととらえられる。歯根部の厚みを減じる加工は、根ばさみに装着するためとも考えられ、素材が本来もつ丈夫さと鋭利さを生かして鏃として使用することは十分に可能であろう。

ところで、124 号人骨[5)]・1405 人骨・1406 号人骨はいずれも熟年男性の単体埋葬であり、抜歯が見られるという共通点がある。こうした被葬者の属性とサメ歯製牙鏃の関連性についても、今後検討する必要があろう。

なお、サメ歯製品は縄文時代からみられるが、歯根部に穿孔や抉り込みを施すものが多く、垂飾として報告されているものが多い［三島 1980］。弥生時代では、土井ヶ浜遺跡出土資料と同様の製品が佐賀県菜畑遺跡で出土しており、加工が歯根部の研磨のみであることから装身具とは別の用途が考え



＊トーンは加工の及ぶ範囲

図８　土井ヶ浜遺跡出土サメ歯製品実測図（S=1/1）

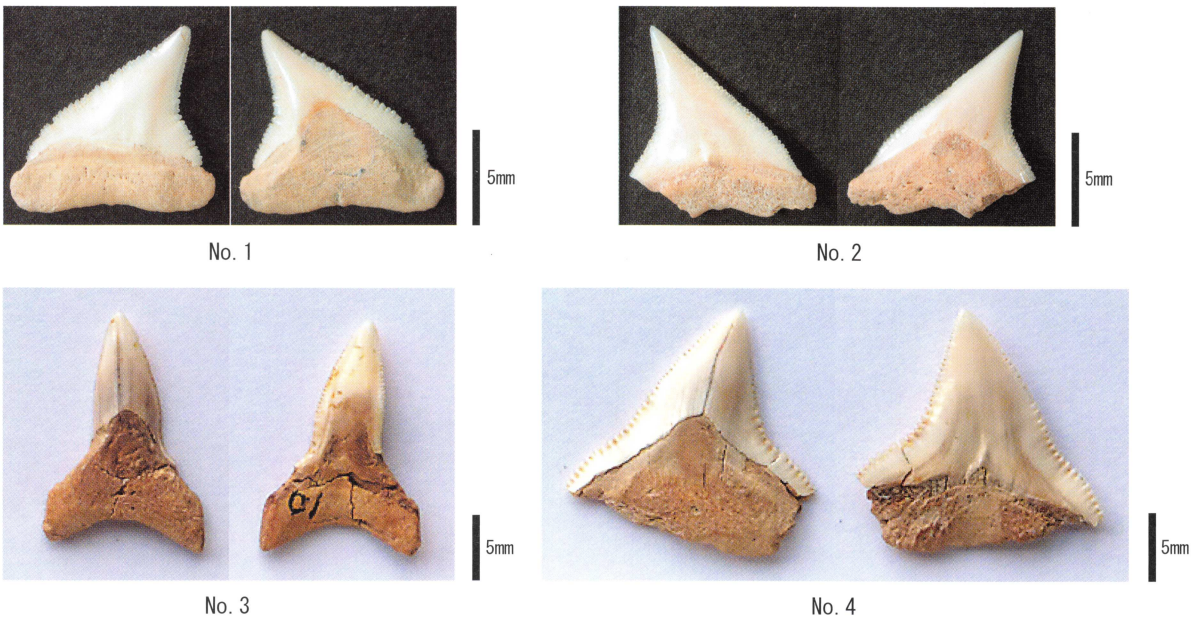


写真１　土井ヶ浜遺跡出土サメ歯製品（番号は図８の番号に対応する）

られるとして、牙鏃として報告されている［唐津市教委 1982］。

おわりに

整理作業中に見つかった2点のサメ歯製品を紹介し、2次調査出土の2点と比較して、土井ヶ浜遺跡出土サメ歯製品の特徴についてまとめた。

今後の課題は2点ある。まず第1に、素材のサメの種類を同定することである。属・種レベルまで同定できれば、近海に生息するサメであるのか否かがわかる。さらに、同種標本との比較により、同一個体が持つ歯のバリエーションの範疇であるかを確認することが可能になる。第2に、土井ヶ浜遺跡出土資料と同様の加工を施したサメ歯製品の類例を集成することである。特に、山口県と周辺地域での分布状況を把握する必要がある。こうした作業を経て、今回は十分に検討できなかった用途の問題や、土井ヶ浜遺跡出土資料の位置づけについて再考する機会を持ちたい。

《謝辞》

本稿執筆にあたり、奈良文化財研究所環境考古学研究室の松井章氏、下関海洋アカデミー展示部魚類展示課の土井啓行氏・落合晋作氏、下関市立ホタルの里ミュージアムの川野敬介氏、土井ヶ浜遺跡・人類学ミュージアムの小林善也氏に御協力と御助言をいただきました。感謝申し上げます。

註）

1）本稿における第14次調査の成果や出土遺構・出土人骨に関する記述はすべて第14次発掘調査報告書［松下・有福編 1996］による。

2）ST1405・ST1406の出土状況側面図では、人骨が墓壙床面より20cm以上も上位にあり、報告書では「墓壙を深く掘削した後に再度砂を敷き、遺体を安置するための床を形成した」と解釈している。しかし、他の調査区においてこのような事例が無いため、今後再検討の必要があるだろう。

3）計測はデジタルノギスを使用して小数点以下第2位を四捨五入し、重量はデジタル天秤を使用した。以下の資料も同様。

4）軟骨魚綱 Chondrichthyes　板鰓亜綱 Elasmobranchii　ネズミザメ上目 Galea　メジロザメ目 Carcharhiniformes メジロザメ科 Carcharhinidae。この中でも、歯の形態が本資料とは異なるイタチザメ、ネムリブカ、ウシザメ、ホコサキは除外できる。

5）124号人骨は熟年男性で、埋葬姿勢は仰臥伸展、顔面が破砕されているため全容は不明であるが、少なくとも左上顎側切歯の抜歯が確認される。

《参考文献》

金関丈夫・坪井清足・金関 恕　1961「山口県土井浜遺跡」『日本農耕文化の生成』 東京堂.

唐津市教育委員会　1982 『菜畑遺跡』 唐津市文化財調査報告第5集.

中坊徹次 編　2000 『日本産魚類検索　全種の同定　第Ⅱ版』 東海大学出版会.

松下孝幸・有福史博 編　1996 『土井ヶ浜遺跡　第14次発掘調査報告書』 山口県豊北町教育委員会.

三島 格　1980 「九州および南島出土の鮫歯製垂飾について」 国分直一博士古希記念論集編纂委員会『日本民族文化とその周辺．考古篇』 新日本教育図書：359-386.

写真２　ST1405（左）・ST1406（右）出土状態　（西から）

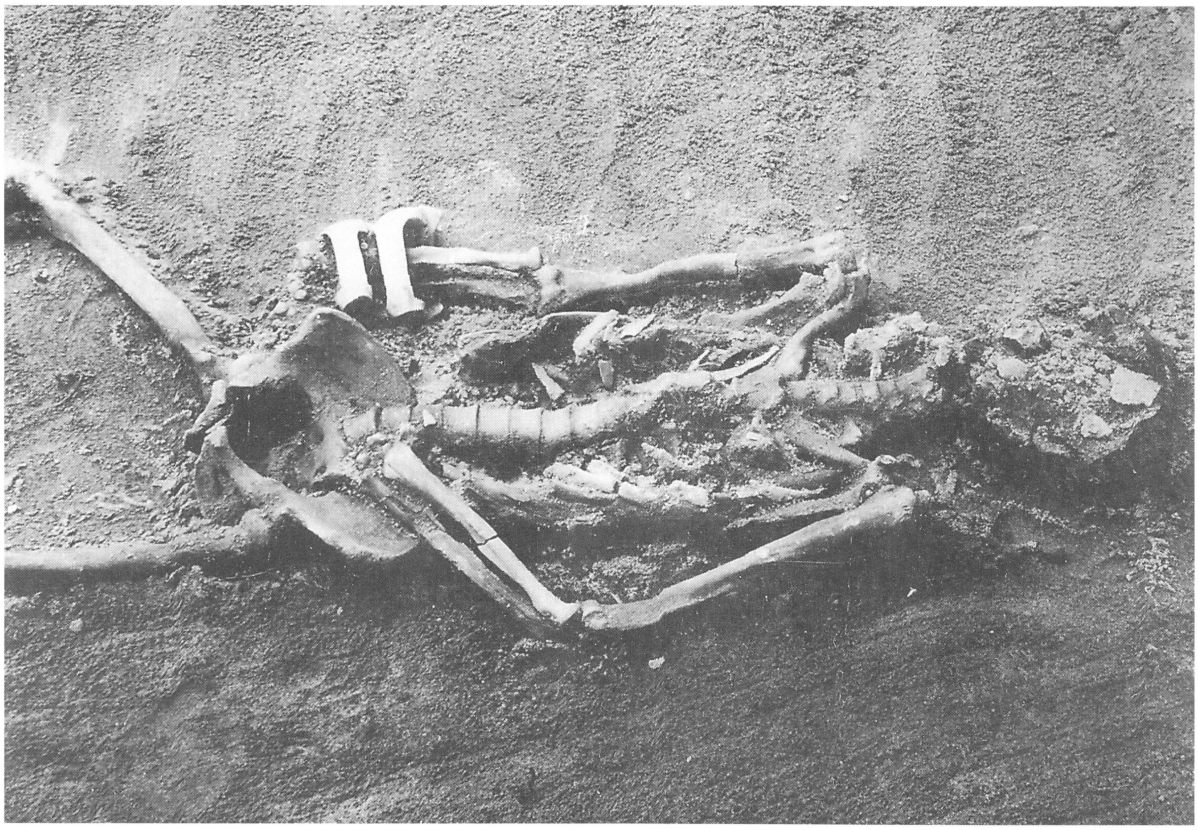


写真３　124 号人骨出土状態　（南から）

土井ヶ浜遺跡・人類学ミュージアム

研究紀要

第８号

発行年月日　2013年３月
編集・発行　土井ヶ浜遺跡・人類学ミュージアム
〒759-6121　山口県下関市豊北町神田上891-8
TEL　083-788-1841･1842
FAX　083-788-1843
印　　刷　株式会社吉村印刷
〒750-0004　山口県下関市中之町5-9
TEL　083-232-1190
FAX　083-232-1189